

平成 22 年 6 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18720152
 研究課題名（和文） 国際理解教育が児童の理解・意識・態度の伸長及び自己の確立に及ぼす影響
 研究課題名（英文） Elementary School Students' Affective Changes through English Activities in International Understanding Education
 研究代表者
 山賀尚子（YAMAGA NAOKO）
 東京純心女子大学・現代文化学部・講師
 研究者番号：70350527

研究成果の概要（和文）：本研究は児童用国際理解アンケート（IUQC）を作成、1年間の国際理解教育を経験した児童の心的変化を国際的志向性、自尊感情、社会的自尊感情と定義し、IUQCを用いて測定した。結果、3概念のうち1つ（国際的志向性）に肯定的な変化が見られた。

研究成果の概要（英文）：In this research, the researcher invented the International Understanding Questionnaire (IUQC). Elementary school students' affective changes were defined as International Posture, Self-esteem, and Collective Self-esteem from the theoretical background. The changes of these constructs before and after the one-year international understanding lessons were measured with the IUQC. As a result, one of affects, International Posture showed a statistically positive change from the pre- to the post administration of the IUQC.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	420,000	2,620,000

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：若手研究（B）

キーワード：①国際理解教育②総合的な学習の時間③英語活動④自尊感情⑤社会的自尊感情⑥国際的志向性⑦児童用アンケート⑧公立小学校

1. 研究開始当初の背景

平成14年に公立小学校で「総合的な学習の時間」が導入されて以来、小学生が国際理解教育という枠組みの中で英語活動に触れるようになった。しかし、その授業を実施して得られる効果について深く議論されておらず、実証研究はわずかに存在するだけであった。特に、児童の態度をはじめとする心的変化に着目した研究は著しく不足して

いた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)異文化を理解し共生する態度と自己の確立を、児童の発達段階を考慮した上で明確化し、各々を測定するための尺度を開発すること、(2)公立小学校で国際理解教育を経験した児童を対象に国際的態度の伸長及び自己の確立を測定

すること、の2点である。

3. 研究の方法

(1) 児童用国際理解アンケートの作成

先行研究を踏まえ、児童の心的変化を測定する児童用国際理解アンケート (The International Understanding Questionnaire for Children, IUQC) を作成、近隣の公立小学校高学年児童を対象に、1年間の国際理解教育授業の前後で、情意面における変化を比較した。比較については、two-way mixed ANOVA を行った (SPSS 12.0 を使用)。さらに、3年間に及ぶ複数年での結果を比較、尺度に改良を加えた。

(2) 調査対象

初年度は2006年4月～2007年2月までの約1年間、国際理解教育の授業を受けた都内のA公立小学校児童105名(6年生44名、5年生61名)が参加した。

次年度は2008年4月～2009年2月までの約1年間に国際理解教育の授業を受けた都内のA公立小学校児童109名(6年生51名、5年生58名)が参加した。

最終年度は2009年4月～2010年2月までの約1年間、国際理解教育の授業を受けた都内のAおよびB公立小学校児童231名(6年生119名、5年生112名)が参加した。

4. 研究成果

(1) 本研究では、児童の心的変化を国際的志向性(英語学習における国際的友好性(Intercultural Friendship Orientation in English Learning)、他の集団との距離の保ち方(Intergroup Approach-Avoidance Tendency)、国際的な職業や活動についての興味(Interest in International Vocation or Activities)の3構成素から成る)、自尊感情、ならびに社会的自尊感情(構成員としての自尊感情(Membership Esteem)、公的な集団的自尊感情(Public Collective Self-esteem)、私的な集団的自尊感情(Private Collective Self-esteem)、アイデンティティの重要性(Importance to Identity)の4構成素から成る)と定義し、これらの概念を測定するための児童用アンケート(IUQC)を完成した。

(2) 調査の結果、国際的志向性には統計的にプラスに優位な変化が見られた。「英語学習における国際的友好性」については1年間の授業の前後では優位差が見られなかったが、5、6年の学年間で統計的優位差が生じた($F(1, 103) = 15.624, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .134$)。しかし、同時に学年と授業の前後において interaction effect が見られた($F(1, 103) = 12.633, p = .001, \text{partial } \eta^2 = .109$)。次に「他の集団との距離の保ち方」につい

ては、学年を超えて1年間授業の前後で統計的優位差が見られた($F(1, 103) = 13.27, p < .001, \text{partial } \eta^2 = .114$)。また、国際的な職業や活動についての興味は学年間に大きな開きがあり、統計的に優位な数値を示した($F(1, 103) = 29.04, p = .001, \text{partial } \eta^2 = .102$)。加えて、「海外での出来事への興味」が国際的志向性から独立、授業開始前から数値が高く、児童はそれを1年間維持する結果となった($F(1, 103) = 7.69, p = .007, \text{partial } \eta^2 = .069$)。

自尊感情は1年間という短期間では変化が見られず($F(1, 103) = 2.11, p = .150, \text{partial } \eta^2 = .020$)、さらに長期的変化を探る必要性が見られた。

最後に、社会的自尊感情であるが「公的な集団的自尊感情」「私的な集団的自尊感情」のいずれにおいても1年間という授業期間の前後で数値の変化は見られなかった。「構成員としての自尊感情」および「アイデンティティの重要性」は、児童の場合、2つの構成素ではなく、同一のものとしていることがわかったが、こちらも数値の変化は見られなかった。

次年度は、自尊感情において学年間で変化に大きな差が生じた(5年生の自尊感情が高く、6年生のそれが低い)こと、また社会的自尊感情については、4構成素がそれぞれ独立して存在し、特に「公的な集団的自尊感情」「私的な集団的自尊感情」の2構成素は6年生が1年で大きく数値を伸ばし、統計的に優位な結果を示した点をのぞいては、ほぼ初年度を踏襲する結果になった。

最終年度は、社会的自尊感情をより日本人児童に相応しい概念として定義できるように、概念構成要素の再検討がなされ、授業終了後に数値が向上するという結果が得られた。他の2概念については、先の2年間と同様の結果を示した。

3年間を振り返って、国際的志向性の伸長は英語活動の肯定的な評価材料として期待できる。ただし、自尊感情においては評価対象に含めることは難しく、社会的自尊感情については、欧米での成人を対象とした定義づけから離れ、日本人児童に相応しい新たな意味合いを持たせる必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 山賀尚子、小学生を対象とした情意尺度の開発、平成18年度東京純心女子大学紀要、査読有、第11号、2007、11—22
- ② Naoko Yamaga, Children's Affective Changes in English Activities: A Trial to

Invent a Measurement of Children's Affects, 査読有、JALT 2006 Conference Proceedings, 2007, 192-208

- ③ 山賀尚子、英語活動で児童はどうか変わるのか—東京純心女子大学の取り組みから—、第2回純心四大学フォーラム—新時代の英語教育を考える—研究大会誌、2009、22-24
- ④ 山賀尚子、小学生を対象とした情意尺度の開発、平成20年度東京純心女子大学紀要、査読有、第13号、2009、27-36

〔学会発表〕（計3件）

- ① Naoko Yamaga, Children's Affective Changes in English Activities, JALT 2006 & JALT Junior 2006, 2006年11月3日
- ② 山賀尚子、英語活動で児童はどうか変わるのか—東京純心女子大学の取り組みから—、第2回純心四大学フォーラム—新時代の英語教育を考える—、2008年8月6日
- ③ Naoko Yamaga, Children's Affective Changes in English Activities, JALT 2009 & JALT Junior 2009, 2009年11月22日

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

山賀 尚子 (YAMAGA NAOKO)

東京純心女子大学・現代文化学部・講師
研究者番号：70350527

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし